

島田正治

毎年十月に開かれているメキシコ、グアナファトのセルヴァンティノ国際芸術祭は三十三回を迎える。年ごとにその規模も大きくなり内容も充実多彩で国内はもとより諸外国にも知られるようになってきた。音楽、演劇、美術が主となる。特に今年は日本とスペインが招待国であった。

三月に入って、グアナファトのディエゴリベラ美術館長のフェデリコ氏がこのチャパラへ来られ、今回のセルヴァンティノ祭にはぜひ参加、出品の依頼をうけた。その折、部屋に飾ってあった家内の書がフェデリコ氏の眼にとまり、奥さんの書もぜひ展示したいといわれた。書も絵も共に墨の世界である。日本芸術文化紹介にはこの上ないものであろう。

展覧会はグアナファト市から少し離れたシラオ市、そこの美術館で開く。この話があったあと、さっそく会場を見に行った。美術館は街の中心に近いところにあった。その名前は「ムセオ・ホセ・トーマス・チャ・バス・モラド」間口は狭いがかなり奥行きがあり、普通の民家の三軒分ぐらいはあった。展示室は六部屋、出品数は二人合わせて五十点と見当をつけた。

いつものことながら、さて展覧会のことが決まると、その準備にかからねばならぬ。制作は拍車がかかり熱がはいる。忙しくなる。十月の会期までに約半年はあるから大丈夫とおもった。仕事は展覧会があるので進む。メキシコでまことに有難いのは、この種の催しではいっさい費用がかからない。こちらはただ絵を渡せばよろしい。みな美術館の方でやってくれる。おまかせである。すでにメキシコで展覧会、個展を三十回以上開いているがどこもそうだった。案内状、ポスター、カタログ、みな作ってくれる。至れりつくせりといえる。それに比べ日本はどうだ。多分費用がないとできない。展覧会で何百万もお金をつかうと言ったら、きっと信用してもらえないだろう。国が文化に対しての考え方がちがうのではなかるうか。

十月六日、夕方五時からが開会式で、わたしたちは当日朝早くチャパラを出て、バスでグアナファトへ行った。約五時間かかる。現地に着いてホテルで少し休養、あと美術館からの迎えの車を待ったがこの車の到着がおくれて三十分後にシラオに着いた。美術館前にはおおぜいの人がわたしたちを待っていていたので「すみません、すみません、約束の時間に遅れて」と詫びたが、別に文句をいう人はいなかった。

さらに美術館長や来賓が到着したのがその三十分遅れ、一時間後の六時が開式となった。こんなに遅れたら、きっと日本人なら腹をたてて帰ってしまう人もあるだろうが、それが無い。美術館前には三百人ほどの人が集まっていた。

オープンして、観客はなだれこむようにして館内に入ってきた。狭い部屋は人、人、人で埋まった。時間半ばにして飲み物のジュースがふるまわれた。そして初日のオープンは八時頃終わった。

人が去ってしまったあと、玄関で記念撮影をした。気がつくとも美術館の入口の両側に三メートルもあろう大きな垂れ幕とたたみ一枚分ほどの大きなポスターがかざってあった。(つづく)

セルヴァンティノ芸術祭、記念撮影の写真はブログに掲載中、カテゴリ「島田正治・個展」ご覧下さい
ご意見・ご感想はこちらまでお送りください。